重いテーマを扱いましたが、演劇だからこそ人の心の琴線に触れた部分もあり、劇中に遺族のスピーチとして今年マーシャルを訪れたことや裁判の報告も織り交ぜ今も続いている問題であることを投げかけました。文化活動は平和を創る活動そのものだと思います。今回7名の子どもたちが出演したことで多くの先生達、親や親せき（私の義理父母等も…）、友だちも見に来てくれ核のない未来を考える裾野も広がったのではないでしょうか。座談会でゼミOBの方が「調査も心に残ったけど単純にみんなで集まることが楽しかった。」と言われていましたが演劇を通して同じ時間を過ごし、仲良くなった子どもたち（私の息子も）の交流も続いており、また何かの活動につながるかもしれません。
地域や社会を見つめ他者と繋がり青春を謳歌しながら学び合い表現できる場所、付き添ってくれる仲間や大人がいればいつの時代も青年達は社会を変える力、無限の可能性を秘めています。私たちはこれからも演劇を通して、私たちはどう生きるのかを問い、それぞれの生きることを励ます舞台を創っていきたいと思います。

改めて上演を支援してくださった皆さま、当日見に来て下さった皆さま、ありがとうございました。

（宮川 真幸）

「草原だより」NO165より

御礼の言葉

劇団the・創
西森 良子

ご来場の皆様、本日は誠にありがとうございます。ビキニ事件を演劇に――。その思いは4年の月日を経てやっと今実現されようとしています。

日常の営み、ビキニ沖でマグロを追っかけていたたくさんの船が操業中、なんの予告もなく水爆実験に遭遇し、たった1つしかない命、一度きりの人生が奪われてしまいました。

あっという間に命の灯を消された青年達！ ジワジワと長い間の内部被爆で苦しめられた命。その中でも懸命に生きようとした一人一人の命の証。その命の証を舞台として再現しました。地域の歴史を掘り起こしていた幡多高校生ゼミナールに結集する高校生と教師たちは高知のビキニ被災者がいる事実をつきとめました。語りたい、いや語りたくない、でも知って欲しい、いや知らせなくては。事実を知りたい。

その声に懸命に耳を傾ける人達。その声なき声を伝える活動は全国へと広がり被爆から70年を経て今、非核への願いは大きく高まっています。

ビキニ事件は終わっていない。核はいらない。一発の原水爆も許してはならない。皆さん、ご一緒に核のない未来に向かって歩き始めましょう!!

演劇上映日のチラシより